



中高生とともに差別と闘う

『小説『おかえり』（一部抜粋）』

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）



小説「おかえり」（一部抜粋）

そんな俺たちがしてきた全体学習が、一度だけ反論を受けたことがあった。中学三年のときだ。反論をしてきた相手は、他校の中学生。俺たちが部落問題について語り合っている全体学習を参観していた、他校の生徒会長やその取り巻き連中だった。

「俺から言わせてもらえれば、まだ十四歳や十五歳にしかならない自分たちが部落問題を考えても難しいし、はっきり言って『自分は差別をしない』と思ってるだけいいんじゃないですか。部落問題は歳を取らないと分からないし、たった十四歳や十五歳で悟っても仕方ないし、答えが出るわけでもないし。大人だって、この歳で部落問題なんか分からなかったんじゃないですか。今はこんな勉強をするよりも、もっと友達を作って、いっぱい遊んで、そういう差別を吹き飛ばせるようにすればいいと思うんです。それに、教科の勉強と人権の勉強を両方一生懸命頑張るといことは難しいから、どちらかを優先しないといけないし、どちらかに絞った方がいいと思うんです。両方やられれば、それこそ今の子どもは忙しくて、いじめや自殺をするようになると思います。」

は救われただろうか。問題の解決につながっただろうか。俺たちには卓也のカレー事件があったから、当事者が思っているだけでは駄目だ、という確証のようなものが生まれた。さて、どう答えればいいのか。

自画自賛になるが、あのときの俺たちの「返し」は、見事だった。今でもそう思う。

誰からともなく、「その通り！」とばかりに賛同の意見を述べ始めた。つまり、相手を否定しなかった。わざとではない。本当にそう思ったから、そう言った。俺たちはカレー事件に遭遇したからこそ共感的に捉えることができたが、そんなことでもなければ同じ思いになっただけの可能性は大いにある。だから、確かに共感できるのだ。否定はできない。そのことを何人もが述べていくうちに、ではなぜ自分たちはこんな学習をしているのか、という疑問にぶつかって、そうやってみんなが、ハタと立ち止まったのだ。我に返ったと言ってもいい。そのとき、同級生の千尋が手を挙げ言った。

「好きだからしている。私はこの学習が好きだからしている。部落差別は許せない。あつてはいけないと思う。でも、部落差別のおかげで、私はこの学習に出会うことができた。この学習に出会ったおかげで、友達の知らなかったことが見えてきたり、友達のことを真剣に考えたりできるようになった。そう考えた今の自分のことは好き。部落差別はあつてはいけな

いけど、この学習はあつてよかったって思ってる。この学習に出会えてよかったって思ってる。こうやってみんなと語り合うこの時間が、私は好き。」

まさにその通り、と拍手しそうになった。彼女の言葉に応えるように、またしても何人もが賛同の発言を繰り返していった。

そのときの風景はまるで、大きな両掌で、ゆっくりと会場全体を包み込んでいくようだった。決して鋭い槍の先で突き刺すのではない。それはあたたく、やわらかかった。そのときにも見えた。光の筋はまどろっこしくもあるが、行きつ戻りつしながら、手を差し伸べるようにその歩みを整え、ゆっくりと伸びていくようだった。

授業の最後に、冒頭で発言した生徒会長があらためて手を挙げた。

「俺は、みんなみたいな熱い関係をうらやましく思いました。最後に、今日は本当にありがとうございました。うございました。」

光は、結ばれた。

授業には、いつも何かの教材があった。だがしかし俺たちはいつも、その教材を通して自分のことを語っていた。友のこと、クラスのこと、自分の家族のこと、過去の自分のこと。それが教材とどうつながり、何を学んだのかを語り合った。結論が特にあるわけではない。ただ、そういう時間に心地よさを感じていたし、とにかく考えていた。そうやって俺たちは俺たちで俺たちを変えてきた。変えてきたというより、いつの間にか変わってきた、という方が正確だ。一人一人単体ではまったくもって不完全な存在だが、大勢が合わさって語り合い議論していくと、いつの間にか望ましいような解答にたどり着く。別に誰かが狙ってその方向に誘うわけではない。いつの間にかその方向にたどり着くのだ。だから、語り合うことは不思議であり、楽しかった。

時間がかかる。面倒と言えば面倒だ。おそらく、相当な回り道もしているのだろう。しかし、だからこそ楽しい。みんなで時間をかけて歩く、その道程が心地いい。在る道を歩くのではなく、道なき道を歩いた後に道ができることが、楽しい。だから、俺たちは語り続けてきた。それはまるで、幾本もの光の筋が同じ方向に向かって進んでいるような感覚だ。光の色はそれぞれで、筋の太さもそれぞれで、進み方もそれぞれ。ときに遅くなったり、速くなったり、違う方向に逸れたり、絡まったりもする。かといって、一本に合わせることもない。同じになることを誰にも強要されないし、それぞれの筋はあくまでも独立した存在で、同じ方向に向かっていくことに変わりはない。

答えのない問いにみんなが向き合っているような感覚——まるでそんな感覚だった。

全文はHP「今月の一冊」からご覧いただけます。

（つづく）